

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520601

研究課題名(和文) 統語論と形態論のインターフェイスの研究 N A形容詞句

研究課題名(英文) A Study of Interface between syntax and morphology -- with special reference to N-A adjectives

研究代表者

有村 兼彬 (Kaneaki, Arimura)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：70068146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては形態論が統語論と意味論と接触する現象に取り組んだ。伝統的な統語論研究において、統語論は語レベルの中に入り込むことはできないとされてきたが、有村は英語におけるN-A形容詞を調査し、統語論研究で提唱された原理や原則が形態論のレベルにおいてもその効力を持つことを示した。一方、高橋は日本語におけるN+A複合語(e.g. 油っばい、男っばい)と統語的要素を含む複合語(薬っばい、嘘っばい)が形態レベルにおいて違いを示すという事実(i.e. 油っばさ、*薬っばさ)を指摘し、形態的緊密性は構造的・意味的に捉えることができることを示した。

研究成果の概要(英文)：In this project, we were concerned with the interface phenomena between syntax and morphology, particularly paying attention to what we call NA Adjectives. Despite the traditional idea that syntax is blind to what happened in morphology, Arimura argued that the principles needed with respect to syntax are effectively operative in morphology. On the other hand Takahashi was interested in two types of Japanese compounds; one formed by compounding of a noun and an adjective, and the other formed by syntactic operations. He argued that lexical integrity can configurationally and semantically be captured.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：統語論 形態論 意味論 インターフェイス 名詞編入 嚮濁

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の有村兼彬はこれまで主として統語論研究を行い、研究分担者の高橋勝忠は形態論研究を行ってきたが、複合形容詞に関して、統語論と形態論が相当程度にオーバーラップすることに注目し、最近の生成文法の方法論をもって検討すれば何か新しい知見が開けるのではないかと考えて、研究チームを組んだ。もっと広い視点から言えば、本研究は統語論と形態論のインターフェイスに関わる研究でもある。昨今の生成文法理論によれば、統語論で観察される原理原則が、それだけに留まらず他の部門にも有効であることが示されているが、われわれが目にした複合形容詞の生成に関して、この点に関してどのようなことが言えるか検討しようと思った。

2. 研究の目的

有村が特に注目したものは英語における Noun-Adjective 形容詞とも言うべき species-specific/drug-free/water-proof(それぞれ「主固有の」、「ドラッグのない」、「防水の」の意味)の類の形容詞群である。これは、widely-known などのようなものも含めて複合形容詞と呼ばれてきたが、本研究では特に名詞が形容に編入されている形式を取る形容詞に注目する意味で、これを「名詞編入複合形容詞」と呼んだ。この種の形容詞の特徴は、語レベルあるいは語形成レベルであれば「名詞+形容詞」の形態であるが、句レベルあるいは統語レベルでは specific to species/free from drug/proof of water のように前置詞構造に対応するという点である。つまり、統語操作に参入する前の段階で生じた形式と統語操作に関わる形式とがそれぞれ固有の形式を持つことになる。この2つの過程をどのように捉えることができるかを検討し、それが生成文法理論にどのような意味合いを持つかを検討することを目的とした。また、一方、高橋はこれまで派生形容詞に注目してきたが、この研究を通じて複合形容詞一般に関して研究の視野を広げ、主として日本語における複合語、例えば、「発達中」や「嘘っぱい」などのタイプの意味的特徴あるいは分布上の特徴について研究することを目的とした。

3. 研究の方法

有村は、平成23年度と24年度は主としてデータの収集と分類に当り、最終年度に「名詞編入複合形容詞の派生について—統語論と形態論のインターフェイス」(甲南大学紀要・文学編 164)でその成果を発表した。データ蒐集は、既に出版された研究書に依存するだけでなく、新しい表現形式を求めてインターネット等を使って検索した。高橋は、問題となる表現形式を新聞・雑誌から集めることに加えて、日々の内省によって事例を検討して来た。その結果が『〜中』の意味と連濁の関係について」(日本認知言語学)と「語

と語彙化の頻度に基づく一語化の違い」(『言語学からの眺望 2013』)で発表されている。また、高橋は、平成24年度に甲南英文学会において、25年度に関西レキシコンプロジェクト及び日本認知言語学会において研究発表を行って様々なコメントをもらって思考を深めることに務めた。更に高橋は、本基金の援助を得て平成24年度、25年度イギリス言語学会に出席し、イギリスにおける研究者と交流を図り有意義な情報に触れることができた。

4. 研究成果

(1) 有村に関して

有村は、「名詞編入複合形容詞の派生について—統語論と形態論のインターフェイス」において、species-specific の形式の複合形容詞の特徴を検討し、その派生を明らかにし、それが生成文法にもたらす意味について検討した。英語には「名詞+形容詞」の形式を持つ複合形容詞が存在する。この形式は名詞が形容詞に関して一定の論理的関係を持つが、本稿においてはこの関係は統語論で作用すると思われる操作が働いてできたものとする。例えば、eye-catching という複合形容詞において、eye が catching の基体である catch の目的語の働きをすることは自明のことのように思われる。この関係は、何らかの規則によって捉えられなければならないが、本稿においては、英語の基底の語の配列は「主要部—補部」であるという前提に立って(Kayne 1994))、この場合も catch-eye がもとの配列であるとする。そして、次の段階で eye が catch に付加(移動)することによって、最終的な形態である eye-catching が生じると考える。この場合 eye という主要部が移動するという点において、その移動は「主要部移動」(head movement)であって、eye は catch という投射に編入されたのであるから、本稿では eye-catching などのような形容詞を「名詞編入複合形容詞名」(Noun Incorporated Complex Adjective)と呼ぶ。

英語における名詞編入複合形容詞は、第2要素が現在分詞形であるものの他に、family-oriented のようにそれが過去分詞であるものと species-specific のように純粋な形容詞であるものがある。また、この種の複合形容詞の場合、第1要素の名詞と第2要素の形容詞は形容詞に内在する前置詞を介して関係付けられる。また、第2要素が現在分詞形の場合は、上述のように第1要素が現在分詞の基体となる動詞の目的語ではなくて動詞に内在する前置詞を介して関係付けられることもある。

本論文は以下のように全部で7節に分かれているが、各節の概要を以下述べる。

- (a) 第1節においては名詞編入複合形容詞名の類型を調べ、それぞれの特徴を検討した。
- (b) 第2節においては、第1要素が現在分詞に関して目的語の関係をもつ場合を検討し、

その派生について検討し、統語論において想定された規則や原理・原則、具体的には Kayne (1994) の反対称性 (anti-symmetry) の原理、ひいては非対称的 c 統御などの構造をもとにした原理が形態論でも有効であることを示した。

(c) 第 3 節では、第 2 要素が過去分詞・形容詞である場合を検討した。この場合、第 1 要素と第 2 要素とが前置詞を介して関連付けられる。例えば、family-oriented (program) のように、前置詞を用いた後位修飾構造 (the program that is) *related to family* に対応し、前置詞が過去分詞形容詞の選択特性に関わっている場合と、ankle-deep のように deep to the ankle に対応はしても、形容詞と前置詞の関係が薄く、ほぼ付加詞的な関係としか思えない場合がある。

(d) 第 4 節では第 1 要素と第 2 要素との間に緊密な関係が見られない、いわば第 1 要素が第 2 要素に関して「付加詞」とも言えるような働きをする場合について検討した。

(e) 第 5 節においては、編入された名詞の意味論的、統語論的特徴について考え、更に Biber et al. (1999) が分類属格 (classifying genitive) と呼んだものとの類似性を検討し、名詞編入複合形容詞名の語順的特徴を検討した。

(f) 第 6 節では、英語の名詞編入複合形容詞と日本語の関係節の共通性を指摘し、日本語研究で指摘された認可条件が英語の名詞編入複合形容詞の分析においても有効であることを示す。恐らく第 5 節で見た名詞編入複合形容詞名と分類属格との関連性、あるいは第 7 節で観察した名詞編入複合形容詞名と日本語における関係節との関係性 (これは両者とも前位修飾という共通性を偶然持つのだが) は、これまで誰も観察していない知見であると思う。

(g) 第 7 節においては、残された問題を検討した。

(2) 高橋に関して

高橋は、日本語に置ける複合形について考察した。高橋の成果は主に以下の 2 点の論文に収斂されるので、それぞれを以下に述べる。(2-1) 『『～中』の意味と連濁の関係について』における要旨は次の通りである。

『日本国語大辞典』によると、「～中」は体言について、(a) その中に含まれること(空中)、(b) その範囲内であること、また、その範囲全体であること(今週中)、(c) ちょうどそれをしているときであること、その状態であること(授業中、故障中)を表す。本論文では、(a) を「モノ中」(b) を「トキ中」、(c) を「コト中」と呼び、さらに「町中」「世界中」の例を「トコロ中」と呼び、これが (d) である。本論文では「午前中」は「ちゅう」と読むが、「中」は連濁しないまま「町中」「国中」の「トコロ中」のように all の意味 (「午前中、私はずっと勉

強した」と、within の意味 (「午前中、何度も休憩した」) を併せ持つと仮定する。同様に、「期間中」も連濁しないで all と within の意味を併せ持つ (「ゴールデンウィーク期間中、私はずっと勉強した」「ゴールデンウィーク期間中、何度も出かけた」)。「国中」の意味は「国々」「島々」の疊語と同様に、「草木」のような並列構造を持つ「国と国」ではなくて、全体 (all) の意味を持ち、連濁は一語化 (語彙化) を引き起こす要因であると仮定する。「トコロ中」以外に、「トコロ山」「トコロ川」の連濁しないまま一語化される複合語は多く見られる (阿蘇山、富士山、磐梯山 vs. 大雪山; 紀ノ川、姫川 vs. 旭川(岡山)) ことから「午前中」の連濁しない一語化の捉え方は妥当なものと仮定する。

この形式の中には「?午前いっぱい」「?午前ずっと」が「午後いっぱい」「午後ずっと」よりも不自然であることが指摘されているが、これは「午前中」に all と within の両方の意味があり、一方「午後中」は all の意味だけが「中」にあるため、前者は曖昧性を避ける上で「午前中いっぱい」や「午前中ずっと」と「いっぱい」や「ずっと」の表現と「中」が共起し易く、後者は「?午後中ずっと」と「?午後中いっぱい」は「中」に「ずっと」「いっぱい」の all の意味が既に含まれていることによる余剰性に原因があると考えられる。

「コト中」については、「故障中」を巡って判断が異なることが観察されている。本論文では、これに関して「コト中」の成立は事態 (event) を認識できるかどうかという語用論的な条件 (+recognizable) が関与していることを提案した。「故障中」は「その ATM は故障中である」などは自然な表現であり、一方「?頭の中は故障中である」というのはユーモア表現としては使用できるかもしれないが、その事態は認識できない (-recognizable) ので不自然と言える。したがって、精神的活動の「*安心中」などの表現がそれぞれ不自然なのはその事態が心の中にあり認識できないのに対して、「上昇中」「閉鎖中」であれば気温や高速道路などの様子が目に浮かぶ。ただし、「*発見中」「*卒業中」「*入学中」は瞬間動詞なので動名詞の意味概念として時間的な幅が必要である。「トキ中」表現 (「*3 時中」「*30 分中」cf. 「1 時間中」「1 日中」) にも見られるように、点解釈は不自然で、一次元の長さの広がりも 1 時間以上という時間的長さが要求される。したがって、瞬間動詞は点解釈に近いものと考えられる。「?卒業式中」「入学手続き中」とすれば良くなるのは「卒業式」や「入学手続き期間」という限られた時間的広がりが出てくるからであろう。ただし、「会議中」や「検討中」は 30 分でも会議や検討が出来るので、「コト中」表現はその事態が「今、まさに進行中である」

という事態そのものに関心がある表現であるとする。大和田の問題点として指摘する佐伯(2005:73)の「*自転中」「*公転中」は事態そのものが目に見えないので不自然と感じられるが、科学館などで地球や惑星の自転や、公転する様子が観察されるなら、「地球が自転中である」という表現は不自然ではなくなる。

(2-2) また、高橋の「語と語彙化の頻度に基づく一語化の違い」の要旨は次の通りである。

語彙化 (lexicalization) とは何かを再検証し、高橋 (2009: 185) で提案した語彙化の要因、すなわち語の頻度に基づく語彙化、音韻的語彙化、意味的語彙化、形態的語彙化を再検討し、「語の頻度に基づく語彙化」は「頻度に基づく一語化」として捉える必要があることを主張した。例えば、「語の頻度に基づく語彙化」は「～っぽい」にも観察されることを示した。「～っぽい」は名詞、形容(動)詞、動詞の連用形に付加する接尾辞であり(男っぽい、荒っぽい、気障っぽい、忘れっぽい)、「白っぽい」「黒っぽい」は頻度数の高い語である。『明鏡国語辞典』や『集英社国語辞典』には「白っぽさ」「黒っぽさ」の派生名詞形が載せられ、「素人臭さ」「玄人臭さ」の語彙化した意味と「白みを帯びているさま」「黒みを帯びているさま」の中立的な意味が載せられている。本論文では前者の語彙化した意味は「意味的語彙化」の過程を通し、後者の中立的な意味は「語の頻度に基づく語彙化」の過程により生成されると仮定した。この仮定に基づくと次の事例がある程度説明できる。

[A] 一般的に、中立の意味をもつ派生語の基体は「-さ」や-nessの接尾辞を取らない(*黄(色)っぽさ、*白色っぽさ、*茶色っぽさ、*嘘っぽさ、*学生っぽさ(「子供っぽさ」参照 (*youngishness, *babylikeness, cf. cattishness)。しかしながら、中立の意味をもつ派生語の基体でも「白っぽさ」「黒っぽさ」に見られるように「Xっぽい」の基体の使用頻度が増すことによって「-さ」が付加できるように思われる。

[B] 「-っぽい」に関しては、複合語に付いたり(自己紹介っぽい)、動詞の終止形に付いたり(間違ってるっぽい)、句に付いたり(タヌキの子供っぽい)とその用法が拡張しているようだが、基本的にはこれらの事例の「っぽい」は接尾辞ではなくて助動詞なので、本来の接尾辞「-っぽい」と区別しなければならない。助詞、時制接尾辞、複数語尾、助動詞などは機能範疇で、統語論(syntax)との係りをもつものであり、一方、派生接尾辞の「-っぽい」は形容詞の語彙範疇を形成する形態論(morphology)の領域のものである。両者の違いは「-さ」を付加した時点で明確な差が出てくる(*自己紹介っぽさ、*間違ってるっぽさ)。したがっ

て、助動詞の「っぽい」と結合する「Xっぽい」表現を辞書に載せる必要はないと考える。なぜなら、辞書に載せる項目は単純語と接辞と語彙化した派生語・複合語や慣用表現などに限られ、句や文のムード表現や文法範疇の屈折接辞や助詞などを含む表現は語ではなくて統語論の領域に関係するからである。「結構前からあるっぽい」とか「最初からなかったっぽい」のような無理やりな表現は若い人の間でも、一時的な流行はあるかもしれないが、やがて定着しない発話となるであろう。ただし「白っぽい」「黒っぽい」のように日常に定着した「Xっぽい」表現は「白っぽさ」「黒っぽさ」も含めて、辞書に載せておく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 有村兼彬「名詞編入複合形容詞の派生について—統語論と形態論のインターフェイス」甲南大学紀要・文学編、査読無、第164巻、2014年、37-48頁
2. 高橋勝忠「『～中』の意味と連濁の関係について」日本認知言語学会論文集、査読有、第14巻、2014年、1-15頁
3. 高橋勝忠「語と語彙化の頻度に基づく一語化の違い」『言語学からの眺望 2013』(福岡言語学会)、査読有、2013、322-335頁

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 高橋勝忠「『～中』の意味と連濁の関係について」日本認知言語学会、2013年9月22日、京都外国語大学
2. 高橋勝忠「接尾辞『～中』について」関西レキシコンプロジェクト、2013年5月11日、甲南大学
3. 高橋勝忠「語の語彙化と頻度に基づく一語化の違い」甲南英文学会、2012年6月30日、甲南大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有村 兼彬 (ARIMURA, Kaneaki)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：70068146

(2) 研究分担者

高橋 勝忠 (TAKAHASHI, Katsutada)
京都女子大学・文学部・教授
研究者番号：70140796